



難民についてラジオで発信する 宗田勝也さん

—現在行っている活動を教えてください。

「難民ナウ!」を京都三条ラジオカフェ (FM79.7MHz) で制作しています。「難民ナウ!」は、毎週土曜日19時から6分間放送しているラジオ番組です。「難民問題を天気予報のように身近に伝える」をコンセプトに始めました。

—この活動を始めたきっかけは何ですか?

きっかけはいくつかあります。その1つがたまたま知った難民セミナーに参加したことです。「自分が難民になったら?」という問いかけに、はっとさせられたんです。身近な家族に置き換えて考えた時に、遠いはずの難民問題がはじめて自分の事としてリアリティを持ちました。そのとき難民問題は「家族の問題」なんだと強く感じました。

—なぜラジオで発信しようと思われたのですか?

何かしたいと思ったとき、自分なりの手段を考えました。「小さくても発信ツールとしてのメディアを持ち、まず人とつながることから始めよう」と考え、思いついたのがラジオでした。ラジオなら日常生活に動きかけ、難民についてより身近に伝えることが出来ると思ったんです。

—今後の課題は何ですか?

番組を始めた当初は、難民について伝えることが主な目的で、聴き手がそのメッセージをどう受け取るかまでは考えていませんでした。でも今は、伝えるからにはそれを聞いた人に「何が出来るか」という提案まで出来ないといけないのではと思い始めました。そこで立ち上げたのが「P782 (Pな奴) プロジェクト」です。これは全国の大学生が難民を切り口にした取り組みを日本中で企画していくプロジェクトです。参加対象者は全国にある782の大学に所属するすべての学生です。

—今後の展望・夢を教えてください。

難民を「応援する・される」の関係ではなく「自分のこととして関わってゆくこと」が大事だと思います。夢は難民が世界からいなくなり「難民ナウ!」もなくなることです。そして国内外の子どもたちが、自分の家で安心して眠れるようになって欲しいと心から願っています。



難民ネイリストを育成 岩瀬香奈子さん

—アルーシャ設立の経緯を教えてください。

日本に住む難民の人が作ったビーズアクセサリーを販売してその売り上げを難民支援に充てていらっしゃる方とお会いし、日本に住む難民について知るようになりました。また以前口サンゼルスでネイルサロンに行った際、そのネイリストが全員タイ出身だったことや、言葉が通じなくても指さして希望の色を伝えるなどあまり不自由を感じなかったこともヒントになっています。「技術があれば言葉の壁をあまり感じずに始めることができる」と確信したんです。何より、日本のネイルの技術は世界一と言われています。日本で身に付けた技術は、難民の人が今後どこに行っても活かせるのでは、と思いました。

—設立から苦労されたことは何ですか?

何といっても文化の違いからくる認識の違いでしょうか。例えば、時間についての考え方が違います。始めのうちは研修に遅れて来ることもあり、時間を守ることの大切さについて何度も伝えなければなりません。また、サービスにおいて日本人はとても細かい気配りをします。日本人同士だったら知っていて当然ということが難民の人にとっては分からない事も多くあるので、丁寧に伝えていく必要があります。

—お客様からはどのような声が届きますか?

お店にいらっしゃる皆さんは、あたたかく応援して下さい。毎回同じネイリストを指名して下さる方が、そのネイリストの日本語の上達を褒めて下さることもあります。また難民問題に関心を持って下さる方も多いです。

—アルーシャに勤務する難民の方からはどのような声が聞かれますか?

残念ながら日本はまだ難民に対しての意識が低く、難民の人が職を得たとしても職場で差別的な扱いを受けることがあります。また職を得たとしても飲食店の調理場や洗い場での仕事が多く、このまま一生を終えるのかと不安だったという人もいました。プロのネイリストとして仕事し、日本人のお客様に「ありがとう」とお礼を言ってもらえることは大きなやりがいにつながっているようです。

KANAKO IWASE

新卒で大手人材派遣会社へ入社。その後、外資系金融ソフトウェア企業へ。ベンチャー企業立ち上げに参画後、2004年英国ビジネススクールへ留学。帰国後、米系エグゼクティブサーチファームにて3年半勤務し、2009年「株式会社アルーシャ」を設立。翌年、難民ネイリストによるネイルサロンをオープン。

KATSUYA SODA

1966年京都に生まれる。同志社大学大学院総合政策科学研究科博士後期課程修了。2004年からラジオ番組「難民ナウ!」を京都三条ラジオカフェで制作。日本UNHCR-NGOs評議会 (J-FUN) のメンバー。龍谷大学、神戸親和女子大学常勤講師をつとめる。吉本新喜劇に5年間在籍したという経歴も持つ。



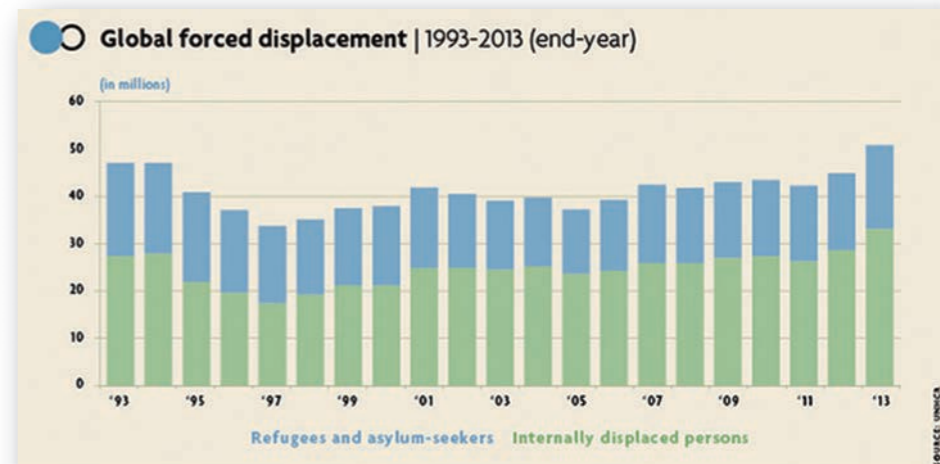
Global Trends 2013 Special

グローバル・トレンドズ 2013 特集 一数字で見る難民情勢一

2014年6月にUNHCR本部が発表したグローバル・トレンドズ・レポート (年間統計報告書) によると、難民、庇護申請者、国内避難民の数が第二次世界大戦後初めて5000万人を超えた。

2013年末時点で紛争、迫害や人権侵害のため移動を強いられた人の数は5120万人に上る。2012年末時点で移動を強いられた人の数は4520万人であり、わずか1年間で600万人増えたことになる。数が急増した主な要因はシリア紛争である。長引く紛争によって250万人が難民となり、650万人が国内避難民となった (2013年末時点)。

以下の数値は2014年6月にUNHCR本部が発表したグローバル・トレンドズ・レポート (年間統計報告書) に基づく。



各年における難民・庇護申請者・国内避難民の数 (1993 - 2013年12月31日現在)

数字から読み解く2013年の傾向

新たな避難民 ----- 1070万人

紛争や迫害によって、新たに250万人の難民を含む1070万人が避難を余儀なくされた。これは1994年以降、最も多い数である。また820万人が新たに国内避難民となり過去10年で最多となった。

避難を余儀なくされた人 -- 1日に3万2000人

UNHCRの支援対象者 ----- 4290万人
2013年末時点でUNHCRの支援対象者数は4290万人であり、過去統計上最も多い数である。

子ども ----- 50%

全難民のうち50%が18歳以下の子どもである。これは過去10年で最も高い比率である。

無国籍者 ----- 約350万人

UNHCRは2013年の無国籍者数を約350万人と報告しているが、実際の数はこの3倍であると見られ、少なくとも1000万人以上が無国籍者であると見られる。

出身国 ----- トップ3

世界中の難民の53%以上が、アフガニスタン (256万人)、シリア (247万人)、ソマリア (112万人) 出身であった。

受け入れ国 ----- トップ5

パキスタンが世界最大の難民受け入れ国 (160万人) であり、イラン (85万7400人)、レバノン (85万6500人)、ヨルダン (64万1900人)、トルコ (60万9900人) と続く。

第三国定住 ----- 21ヶ国

2013年に第三国定住によって9万8400人の難民が21ヶ国に受け入れられた。アメリカが最も多く受け入れている (6万6000人)。

帰還 ----- 41万4600人

2013年帰還した難民数が41万4600人だったが、これは過去25年間で4番目に低い数字である。

庇護申請 ----- 110万人

難民として庇護を求めた申請者数は110万人であった。庇護申請が行われた国は先進国が多く、ドイツが庇護申請数の最も多い国となった。これに、アメリカ、南アフリカ、フランス、スウェーデンが続く。





©UNHCR/S. Baldwin

イラクのモスルからクルディスタン地域に避難してきた少女たち。



©UNHCR / A. McConnell

アシュラフ アシュラフはシリア紛争が始まった2011年3月にホムスで生まれました。アシュラフの誕生から一週間もしないうちにホムスは戦渦に巻き込まれ、ほとんど家を出ることが出来ない状態が数ヶ月間続きました。病気になったアシュラフを近所の診療所に連れて行くことさえ出来ない厳しい生活を強いられました。

アシュラフがまだ1歳半のとき、アシュラフの家族は車にわずかな貴重品を積みレバノンへ向かいました。ホムスの自宅は数日後破壊され、略奪されてしまいました。

現在アシュラフが暮らしているのはベカー渓谷。崖の上に建てられたビニールシートや布、鉄くずでつぎはぎされている家です。テントのまわりを元気に走り回るアシュラフですが、今でも大きな音を怖がることもあるといいます。

「紛争を予防したり、解決する事が出来ないという現実がいかに大きな犠牲を伴うのかを我々は目の当たりにしている。平和が危機に瀕している。人道支援は一時的に問題を緩和することは出来るが、政治的解決が不可欠である。」

アントニオ・グテーレス国連難民高等弁務官



©UNHCR/H.Caux

ゼイナブ

ナイジェリア・ボルノ州出身のゼイナブは、暴動で両親を亡くしました。兄弟とも離ればなれになり、お金も食糧も尽き、駐車場で寝泊りしていました。今はホストファミリーのもとで生活していますが、家族との再会を強く望んでいます。



厳しい都市部の生活
厳しい環境の中、コロナ
ビアの首都ボゴタで暮ら
す国内避難民の家族。

©UNHCR/B.Heger



©Dejan Cukorilo

デジャンの手紙

「友へ」
まだあの試合を覚えているよ。僕たちのチームが勝って、とても嬉しかったね。この幸せは永遠に続くものだと思っていた。でもそれは違っていた。

僕たちが一緒に遊んだ路地を覚えているよ。僕たちの町も。幸せな時間をともに過ごしたね。世界中でこれ以上の場所なんてないと思っていた。でもそれは違っていた。

君の13歳の誕生日パーティー、まだ覚えているよ。君のおばあさんの手料理の味、一緒に歌ったこと、よく覚えている。さよならは、言わなかったね。

けれどその数日後に紛争が起きて、僕たちの子ども時代は奪われてしまった。僕たちの町は包囲されてしまったけど、僕たち家族はなんとか脱出することが出来た。祖国から遠い、新しい国で平和と自由を手に入れた。

いつしか、僕は新しいチームで活躍するようになった。僕たちが昔いたチームほど強くはないけれど、それでも僕を笑顔にしてくれるんだ。ここはとてもいい所で、友達も出来たよ。また誕生日パーティーが出来るようになって、僕の心の傷も癒えていった。

今住んでいる国は、僕が失ったものを全て与えてくれた。君というかけがえのない存在を除いて、全て。やっぱり、あの時さよならは言わなかったんだと思う。だってあれが君と過ごす最後の時間になるなんて、想像もしなかったから。君の最後の誕生日パーティーが。

シャハド 4歳のシャハドはシリア西部にあるハマ近郊の村で生まれました。シャハドとは「蜂蜜の一番甘いところ」という意味。

昨年9月住んでいた家が攻撃され、10歳の兄とまだ2歳にもなっていなかった小さな妹、そして5人の親族を亡くしました。シャハドは瓦礫の中から救助され一命を取り留めたものの、顔はずたずたに裂け、美しくやわらかい髪は頭部から引き剥がされてしまいました。家族は急いでシャハドを近所の病院に連れて行きましたが、人手不足の病院では十分な処置をして貰えませんでした。その後、収容される不安に怯えながらレバノンにたどり着きました。



©UNHCR/E. Dorfman

UNHCRによる難民登録を済ませ、マットレス、毛布、調理道具や衛生キットなどの支援物資を受け取り、避難所での生活が始まりました。

stories.unhcr.org/jp

6月20日

世界難民の日

世界中で多くの家族が家を追われています。

ストーリー

UNHCRは紛争が家族にもたらす影響について
キャンペーンサイト「ストーリー」を14ヶ国語で展開しました。

「本当の意味での平和を実現するための方法はひとつ。紛争に関わった人全員が自らの過ちに気づき、そしてお互いを許しあうことです。」

29歳のキャロルは語ります。

キャロル

「私たちの村は、果物が豊富に実る木に囲まれ、金の採れる土壌に恵まれています。平和に暮らしていたんです、あの冬のあの日までは。いつもは子ども達の笑顔であふれる村が死体で埋めつくされました。襲撃から5日後に戻って目にしたのは、完全に焼き払われた家でした。お金も食糧もなく、さらに夫は連れ去られてしまったのです。なすすべもなく一番幼い子どもを抱きかかえ、近隣の住人からパンを分けてもらいに行きました。あれほどの悲しみを味わったことはありません。」

キャロルは今中央アフリカの国内避難民キャンプで生活しています。



©A. Kitidi



©CANON INC. 2013

ジャーナリスト 池上彰

「ヨルダンのパレスチナ難民キャンプやシリア難民のキャンプ。最初はテントだったものが、コンテナ型の仮設住宅になり、やがてコンクリート製の住宅に。住む場所が堅牢なものになるにつれ、故郷への帰還は遠くなります。」

早く故郷の恒久住宅に戻れますように。それを願っています。」



©UNHCR

ユニクロ

新宿のビックロ店内のスクリーンに映し出される「世界難民の日」のメッセージ。UNHCRのパートナーであるユニクロは、新宿ビックロの全フロアで「世界難民の日」のイメージを店内のデジタル・ディスプレイに投影し、難民キャンプなどへ送るための服の回収を行いました。



©UNHCR/S. Rich

トゥウェルメー

14歳のトゥウェルメーは、タイ北部にある中学校に通っています。ミャンマーの少数民族カレン出身の両親のもと、難民としてキャンプで生まれ育っています。

J-FUN ユース

「難民は支援されるだけでなく自立し、力強く生きていることを多くの人に知ってもらいたい。」

難民問題や人道支援に関心を持つ学生が集まって活動する団体「J-FUN ユース」では17歳から24歳までの学生が活動しています。

J-FUN ユースは「世界難民の日」に『なんみしゅらん〜故郷の味、ごちそうさま〜』を東京大学の生協食堂で開催しました。イベント名「なんみしゅらん」には日本にいる難民が経営しているレストランの存在や、ミシュランガイドに載っている一流レストランにも引けをとらない、料理の味を知ってもらうことで難民問題をより身近なものとして捉え直して欲しいという熱い思いが込められていました。



©UNHCR

「この女性の年齢を聞いてとても驚きました。彼女の名前はラソール。ミャンマーのラカイン州の暴動によって家を追われることになった時、75歳でした。私はこの写真を撮影してからこの年齢の人が一体どのようにこの状況と向き合っているのだろうと考えるようになりました。避難生活は誰にとっても辛いものです。」

中でもそれまで長いこと小さな村で過ごしてきたラソールのような高齢の人が、突然暑くて埃っぽい難民キャンプで生活することになるのは精神的に耐え難いはず。自分の祖母がこんな環境で暮らしていると想像してみたら避難生活がどんなに辛いかわ少しは理解できるかもしれません。

このような高齢の女性たちは私たちの家族と同じように誰かの祖母であり、母であり、姉なのです。こんな生活が長く続くことなどあってはならないと感じます。」

写真家 フィル・ベハン



©P. Behan/2012

「紛争予防のために全力を尽くすことは国際社会に課せられた責任です。今日、これほど多くの難民・避難民がいるということは国際社会がこの責任を全う出来ていないことを意味します。」

アンジェリーナ・ジョリーUNHCR特使